

教育実習と学校ボランティアの関連性を めぐる研究動向とその課題

— 教職志望学生の予期的社会化の観点から —

歌 川 光 一・鈴 木 翔

Trends and Issues in the Study about the Relationship between
Teaching Practice and School Internship:
from the View of the Anticipatory Socialization of Teachers

Koichi UTAGAWA, Sho SUZUKI

1. 問題の所在

1-1. 研究の背景

中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会は2015年10月15日、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(答申素案)をまとめ、大学の教職課程に学校インターンシップを導入することを提言している。学校インターンシップは、各大学の判断により教職課程に位置付けられ、教育実習の一部として充てられることも認められるとともに、大学独自の科目として設定することも引き続き可能となるとされる(同上答申)。

同答申素案では、学校インターンシップの意義について、①「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である」、②「学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義である」、③「学生を受け入れる学校側においても学校の様々な活動を支援する地域人材の確保の観点から有益である」と整理している(同上答

申)。

この「学校インターンシップの導入」の提案は、既に「教員養成系の学部や学科を中心に、教職課程の学生に、学校現場において教育活動や校務、部活動などに関する支援や補助業務など学校における諸活動を体験させるための学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組が定着しつつある」(同上答申)状況を踏まえたものである。学校ボランティア¹は「『学校の教育活動について地域の教育力を生かすため、保護者、地域の人材や団体企業等がボランティアとして学校をサポートする活動』と定義され」(杉本2013:107)、「1997年に当時の文部省が策定した『教育改革プログラム』の中の『学校外の社会との積極的な連携』の方策として初めて使用された」(同上)。それ以降、中央教育審議会(1997・1998)、生涯学習審議会(1999)などでも学校支援ボランティア活動の推進が求められ、2000年には、「学校におけるボランティア等活用実践研究」の委託事業が開始された(同上)。このように、学校ボランティアは、1990年代の「開かれた学校づくり」論における地域人材の活用や、2000年代以降の学校週五日制の完全実施に伴う学力向上策といった学校側

¹ 本稿では、先述の答申素案に盛り込まれた「学校インターンシップ」と区別しつつ、山本ら(2013)に倣い、「学生ボランティア」「スクールボランティア」「ティーチング・アシスタント」「放課後学習チューター」等と呼ばれる、教育実習や「学生有志のサークルや同好会、講師等を除いた、学生が経験する有償・無償の学生支援ボランティア」(山本ら2013:132)を、以下「学校ボランティア」と総称して、議論を進める。なお、大学ごとの活動内容と名称の関連については望月ほか(2014)に詳しい。

学校インターンシップの実施イメージ

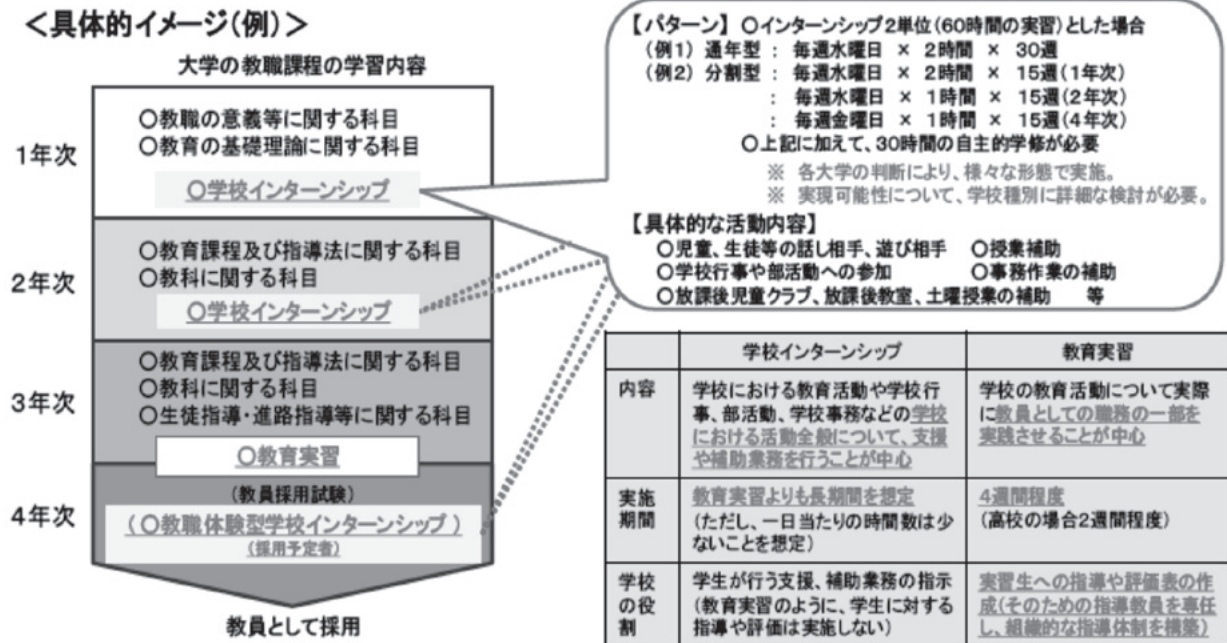


図1：「学校インターンシップの実施イメージ」

出典)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(中央教育審議会教員養成部会答申素案)

のニーズから、その活動が普及していった(長谷川ほか2014:92-93)。

一方で、教員養成の観点から、1997年教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」や同年開始された「フレンドシップ事業」により、教職志望学生の学校現場での体験活動が浸透していき、実践的指導力を有する教員養成を前景化させた中央教育審議会答申(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」において、学校ボランティアは、「履修カルテ」の導入、「教職実践演習」科目の導入、「教育実習指導」の充実とともに、今日の学校現場が抱える複雑化・多様化する課題に十分対応するための大学における教員養成カリキュラムの改善方法として挙げられることとなった(同上:94-95)。

1-2. 本稿の目的

これらの教員改革の動向を受け、大学の教員養成課程の中で、教育実習と学校インターンシップの役割分担や実施時期について精緻化する必要に迫られる。この点について、先の答申素案では以下のように述べられている。

学校インターンシップの実施に当たっては、既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに、その円滑かつ確実な実施に向けて、受入れ校の確保や実施内容の検討等のための教育委員会や学校と大学との連携体制の構築、大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施など、環境整備について今後十分に検討することが必要である(同上答申)。

教育実習と学校インターンシップの役割の違いについて、答申素案中の「学校インターンシップの実施イメージ」では、「教育実習」が「教員としての職務の一部を実施させることが中心」であるのに対し、「学校ボランティア」が「学校における活動全般について、支援や補助業務を行うことが中心」である、というように整理している(図1)。

本稿の目的は、上記のような学校インターンシップへの社会的期待を背景として、教職志望学生の予期的社会化の観点から、教育実習と学校ボランティアの関連性について言及した研究の動向

と課題を整理することにある。

予期的社会化とは、組織に参入する前の社会化を指す (Feldman1976, Fisher1986, Porter, Lawler& Hackman1975)。町支大祐の整理によれば、従来の教員の予期的社会化に関する研究において重要な鍵の一つと考えられてきたのが教育実習であった (町支 2013: 15)²。しかし、1-1で確認したように、今後の教員養成においては、教育実習と学校インターンの役割の違いやその関連性を明確にした上で、カリキュラム開発を行う必要がある。本稿は、その基礎作業として、教育実習と学校ボランティアの関連性について言及した研究の動向と課題を整理しようとするものである。

教育実習に関する研究レビューとして米沢 (2008)、学校ボランティアに関する研究レビューとして武田・村瀬 (2009)、杉本 (2013) 等を挙げることができる。

本稿では、上記のレビュー論文を踏まえながら、近年急速に研究が蓄積されている学校ボランティアに関する研究動向を概観した上で (2.), 教育実習と学校ボランティアの関連性について言及した論考に着目し (3.), 教職志望学生の予期的社会化につながる教育実習および学校ボランティアのあり方を検討する際の視点を提示する (4.)。

2. 学校ボランティアに関する研究動向

既述のように、学校ボランティアの研究動向に関しては、武田・村瀬 (2009)、杉本 (2013) などで整理されている。ここでは、その後の研究動向を概観も含め、教職志望学生の予期的社会化の観点から、学生の意識に現れる効果についてどのような知見が蓄積されてきたかを再整理してみる。

まず、杉本 (2013) によれば、学生ボランティアによる効果・影響として、子ども理解 (児童生徒理解の力、子どもについて、子ども一人ひとりの立場に立って考える力、子どもとの触れ合いによる多様な子ども全体の理解、子ども理解、子どもの発達を直に感じ取れる機会、子どもの行動の意味を考える機会)、成長の実感 (内面的な変化・成長、教師とのかかわりからの学び、子どもとのかかわりからの学び、子どもから得た喜び、学校現場からアドバイス・指導を頂いたことと学生の成長)、協働のための基本姿勢 (協働のための基

本姿勢、コミュニケーション能力、他者に対する姿勢の変化、自他の理解能力、対人援助の基本姿勢、他者との関係づくりを自分で工夫)、対処能力 (個別的具体的な問題が起こった際に対処する力、子どもに接する不安の解消)、教職・学校教育についての意識の向上 (教職志望が高まった、教員志望について強くなった、学生ボランティアが今後の教職に大いに有効、学校教育活動の理解、教員について (自覚、学級経営の仕方など)、教員志望の大学生が現場を知る良い機会になる、“教師”・指導者の立場が育てる教職意識の成果) といったものが挙げられる (杉本 2013: 113)。

次に、溝部ら (2012) は教職志望の大学生を対象に、どのような学校ボランティア活動を経験したか、また、学校ボランティア活動経験が教職志望動機、大学の正課授業の意義認知、教員に必要な資質認知、大学の正課授業受講態度や、教育実習へ及ぼす有用性認知にどのような影響を与えているか、学校ボランティア活動の困難認知と喜び認知測定を行った。その際、溝部らは、学校ボランティア活動の経験が及ぼす影響は性、参加学年、活動参加日数、活動参加時間、参加校種、教育実習経験の有無で異なるか否か検討している。その結果、①学校ボランティア活動の経験は将来の教職志望動機を大きく促進していること、②学校ボランティア活動後の大学での正課授業受講態度に大きく影響していることを明らかにしている (溝部ほか 2012: 41-43)。

溝部ら (2014) は、引き続き、学校ボランティア活動の効果に関する研究図式を規定因、媒介因、結果因といったように精緻化し、学校ボランティア活動の教育効果の要因を検討した。その結果、学校ボランティア活動の経験が教職志望動機を促進し、また、大学の正課授業に対する態度を真剣で、かつ具体性のあるものに変容させ、さらには、教員の資質能力に対する認識を深化させていることを明らかにした (溝部ほか 2014: 40)。特に教職に対する志望動機を促進した理由として、児童生徒とのかかわりに喜びややりがいが見出されると指摘している (同上: 41)。

さらに、長谷川哲也、望月耕太、菅野文彦、山本真人らは、教職志望学生による学校ボランティアが、大学・学生側の「教員養成ニーズ」(「実践

² 今津 (1977, 1978)、橋本 (2001a, 2001b)、南本・加野 (1989) ほか。

的指導力（あるいはその基礎）」の養成・体得」と学校側の「教育活動・業務ニーズ」（「開かれた学校」の実現、多忙化や課題多様化等の問題軽減）双方を満たすものとして展開している点に着目した（山本ほか 2013, 長谷川ほか 2014, 望月ほか 2014）。この中で長谷川ら（2014）は、学習ボランティアの単位化・カリキュラム化、ボランティア経験による採用への期待などによって、学生の「参加の自発性」が喪失される点や、教員と学生の権力関係によって、学生が実際には教員の授業指導や学級経営には干渉しづらいため、活動する内容や関わり方の「裁量の自主性」が限定される状況を指摘している（長谷川ほか 2014：96-98）。

3. 教育実習と学校ボランティアの関係性に関する研究動向

続いて、教育実習と学校ボランティアの関係性に言及してきた研究について概観する。

この点については、米沢（2008）が整理するように、体験的授業科目における教職志望学生の教職意識と教師としての力量の変容に焦点を当てた研究³では、教育実習が、学生の学校における子ども理解や授業指導に関する力量の形成に影響を与えるのに対して、体験的授業科目は学生の学校外での子どもに対するイメージを変容させ、社会教育における青少年活動への指導意欲をも喚起させており、教壇実習に傾斜した教育実習を補完するものとして効果的であることが指摘してきた（米沢 2008：54-55）。

米沢（2008）以降の代表的な論考としてまず原（2009）は、自身の研究のレビューの中で「教育実習とインターンシップに関する調査」を紹介している。同調査では、教育実習の目的や実習前後の変化について、「教育実習のみ」、「教育実習前にインターンシップを経験した」、「教育実習後にインターンシップを経験した」という学校ボランティアの実施時期の観点からその効果を比較している（原 2009：44-45）。

その結果、教育実習の目的について、実習後のインターンシップは、子どもに対する理解の視点をもちやすいのに対し、実習前のインターンシップは教師の教育活動に対して視点が向けられやすいという傾向を示したという（同上：44）。

また、教育実習前後の教職に対する意識の変化について、教育実習前にインターンシップをおこなった学生は「教師という職業に対する見方」や「理想の教師像」がよい方向に変化したと答える傾向にあるという（同上：44）。これらの結果から原は、実習前の現場体験活動と教育実習を組み合わせることによって、教員の動向やもの見方がある程度理解でき、授業を実際に受けもつことによって、教える側の苦労を現実在即してより具体的に知ることができるという効果を指摘している（同上：44-45）。それに対して、教育実習後にインターンシップをおこなった学生は、実習での成功経験から「教師になろうという気持ち」や「教員採用試験への意気込み」をさらに強くする傾向があるという（同上：45）。

原（2009）以降の研究においても、教育現場への理解という点において、学校ボランティアの経験が教育実習に有益であることが指摘されている。

まず、大越ら（2013）は、①学生ボランティアが、学生の「教育現場への肯定感・理解の高まりに有効である」、②「学生の、教員志望意欲は教員の適性理解のために参加する者がいることから、必ずしも上昇しない」、③「学生の、学校教育・教職に対する理解に有効である」（大越ほか 2013：15）といった点を明らかにしている。

また、小倉（2014）は、学校ボランティアを終え、教育実習に入ることによって、学生の教師という職業に対する見方や考え方がプラスに働いており、特に教育実習前に学校ボランティアを体験することによって、教育実習で、「教員の動きや教員の立場でものごとを見ることができ、授業を行うことやホームルーム指導をすることによって、教員の仕事の大変さや難しさを現実在即してよりよく知ることができる」と指摘する（小倉 2014：15）。

さらに、藤原ら（2015）は、2年次実施体験活動から3年次実地体験活動と教育実習という連動した学校現場における学習経験が、教師としての力量形成において持ち得る意味として、学生が、①実地体験活動や教育実習における観察記録やリフレクション記録を通して、学校現場での体験を経験化するための諸観点（子どもの見取り、子ど

³ 栗原ほか（1992）、別惣ほか（1999, 2002）、黒崎（2002, 2006）、羽賀ほか（2004, 2005）、根津ほか（2005）等。

もの個と集団への往還的な対応、子どもの主体性の育成、子どもとのコミュニケーション、教師の仕事の再定義)を獲得している、②**「実地体験活動から教育実習という連動の中で、実地体験活動や実習の授業外文脈での学習を通して獲得した諸視点を、授業の計画・実施等という授業文脈での体験の意味付けに転移的に用い、その結果、子どもとの関わりを巡る認識と関連付けながら、授業そのものを巡る認識を形成している、という点を挙げている** (藤原ほか 2015: 119-120)。

ただし、三島ら (2012) は、フレンドシップに熱心に取り組み意義を感じている学生が教育実習を経験することで、子どものネガティブイメージの一つである自己中心性・二面性や授業イメージの臨機応変を強めることを指摘している (三島ほか 2012: 416)。この理由として、フレンドシップによって子どものイメージがポジティブな側面に固定され、ネガティブ側面のイメージは抱きにくくなっていると同時に、授業イメージにおいても臨機応変に対応するという視点が十分備わっていない可能性が指摘されている (同上)。

このように、教職課程においては、実施学年上の必然性とその教育効果から、教育実習前に学校ボランティアを行うことが想定され、教育現場への理解という点において (若干の学校イメージの固定化を招きつつも)、学校ボランティアの経験が教育実習に有益であることが指摘されている。

4. 今後の課題

4-1. 大学入学以前の予期的社会化の観点から

近年の教員の予期的社会化研究においては、初等中等教育の段階での教師の影響や、学校内でのリーダー経験の中で教師役割を委任された経験の重要性を指摘する研究もある (町支 2013: 14-15)。

3で確認されたように、教職課程においては、実施学年上の必然性とその教育効果から、教育実習前に学校ボランティアを行うことが想定されやすい。その際留意が必要なのは、そもそも1・2年次における学校ボランティアに参加する動機は、大学入学以前の学校経験に影響されやすい点である。

例えば原 (2009) は、教職志望学生の中でも、学校ボランティアに参加する学生の特徴について、中学成績 (上・中・下) と高校成績 (上・中・

下) の3×3のマトリクスから整理している。その結果、参加率の高い学生は、①「上・上」の「優等生タイプ」(「先生になりたい」という思いが大学入学当初から強い、学校文化との親和性がきわめて強い、参加動機としては「今から教師の仕事がどのようなものを学ぶため」という意識が強い)、②「下・上」の「できない子どもの代弁者タイプ」(中学時代に成績が振るわなかったため、学校教員とはしばしば対立経験がある、学校現場で主として不登校児に対するサポートや特別な支援を必要とする子どもへの対応に係わる)、③「上中・下」の「不安定タイプ」(「自分への自信を取り戻すために活動する」、「採用試験対策として活動する」、適性がないと判断した場合は進路変更する)といった傾向が見出されている (原 2009: 45-46)。

また、根津ほか (2005)、中山 (2008)、大越 (2013) では、教育実習前の学校ボランティアを通じて、自身の教員への適性に疑念を抱く学生が一定数存在するために、学校ボランティアによって全体としての教員志望度は必ずしも高まらない傾向を指摘する論稿も存在している。

これらの先行研究から示唆されるように、今後、教育実習と学校インターンシップの役割を検討する際にも、まず教員養成の初段階で行われる学校インターンシップに対する大学入学以前の学校経験の影響を視野に入れることが、教職志望学生に対してより長期的な視点からキャリア指導を行うことにつながると考えられる。

4-2. 「職業的社会化／組織社会化」の観点から

ここまで本稿では、養成段階における「予期的社会化」の観点から研究動向を整理してきた。

ところで近年、教員の社会化に関する研究において、「職業的社会化」と「組織社会化」(人間関係を中心に、その組織に対する適応する社会化)を区別する視点を採用することで、再社会化の枠組みや、現実的職務予告・社会化方策などの視点、社会化の結果が及ぶ対象としての離職意思やコミットメント等の論点を提示しようとする試みもある (町支 2013)。町支は、教職にとっての現実的職務予告の機会として、教育実習や教師塾を挙げているが、本稿で確認してきた研究動向を踏まえれば、学校ボランティアもまた「現実的職務予

告」の場として想定可能であることを前提として、予期的社会化段階における「職業的社会的化／組織社会的化」のどちらを促すか、という教育目的と、「教育実習／学校ボランティア」の役割分担について、その対応関係を検討することの必要性も見えてくる。

具体例を挙げて考えてみると、学校ボランティアをめぐって実際に起こりやすい問題の一つとして、既述のような大学側の「教員養成ニーズ」と、学校側の「教育活動・業務ニーズ」の葛藤が挙げられる。この点について山本ら（2013）は、学校ボランティアについて、大学側が「教員養成ニーズ」と離れかねない学生の労働力化を課題視する発想を持つ一方で、学生にとっては、大学側の「教員養成ニーズ」とは相対的に独立する「教育活動・業務ニーズ」に身を置きながら自分なりに模索、貢献する契機となり得るという視点を提示している（山本ら 2013：140）。

山本らの提案は次のようにも言い換えられるだろう。教職志望学生やその学生を支援する大学にとって、ボランティアの事前・事中・事後の関心は、子どもとの関わり方や教え方の技術の向上や慣れに傾注しがちであり、「職業的社会的化」の観点に立つ場合、「教育活動・業務ニーズ」は「教員養成ニーズ」の副産物のように見受けられやすい。しかし、「組織社会的化」の観点からすれば、職場である学校ごとの働き方や人間関係に従いながら、その場で必要とされる「教育活動・業務ニーズ」を満たそうとすることにおいて社会的化が促進されることとなる。したがって、学校ボランティアにおいて、学生や大学側からして一見教員養成に資さないように労働を担うことになる場合、学生には、「あくまでこの学校に特殊な流儀や人間関係ゆえに生じる労働であり、他の学校でも必要な労働かは定かではない」という視点とともに、「将来は、学校ごとの流儀や人間関係に従って職務に当たらざるを得ないこともあり得る」という視点も合わせ持たせることが、「職業的社会的化」「組織社会的化」の双方の観点からの現実的職務予告となるだろう。

上記はあくまで一例だが、一定期間集中的に子どもと関わり、学校側からの指導の目も行き届く「教育実習」と、長期的ではあるが、断片的な支援や補助業務を行う「学校ボランティア」という

特性の違いを踏まえ、「教員としての資質」と「組織人としての資質」のどちらに重点を置いて活動に取り組むか／取り組めたか、という目標設定／振り返りを、教職課程のカリキュラム上に明確に位置づけていく必要がある。

本稿は、あくまで教職志望学生の予期的社会的化の観点から、教育実習と学校ボランティアの関連性について言及した研究の動向と課題を整理するに留まったが、これらへの実践およびカリキュラム開発の方途については稿を改めることとした。

引用・参考文献

- 新井雅・庄司 一子（2014）「学校支援ボランティアの役割と課題：中学校での実践事例を通して」『筑波大学発達臨床心理学研究』25, pp.1-9.
- 芦原典子（2004）「教職志望者にとっての教育実習とは：スクールボランティア活動に焦点をあてて」『佛教大学教育学部学会紀要』3, pp.217-227.
- （2005）「教職志望者における教育実習への意識に関する研究—スクールボランティアを重視する学生に着目して」『関西教育学会紀要』（29）, pp.126-130.
- 別惣淳二・長澤憲保（1999）「社会教育施設と連携した事前指導・観察参加実習の成果—教員養成の個性化を志向した教育実習カリキュラムの開発—」『日本教師教育学会年報』8, pp.119-130.
- （2002）「社会教育施設と連携した事前指導・観察参加実習の成果（Ⅱ）—実習前の教職志望度が実習生の教師としての力量形成与える影響—」『学校教育学研究』14, pp.1-13.
- 町支大祐（2013）「教員の組織社会的化に関わる研究の動向と展望」『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』33, pp.13-29.
- 中央教育審議会教員養成部会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（答申素案）（URL:www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1363409_2-3.pdf 最終アクセス：2015/12/25）
- Feldman, D. C. 1976 A contingency theory

- of socialization. *Administrative Science Quarterly*, 21, 433-452.
- Fisher, C. D. 1986 Organizational socialization: An integrative review. In K. M. Rowland & G. R. Ferris (Eds.), *Research in personnel and human resources management*, 4, Greenwich, CT: JAI Press.
- 藤原 顕・森美智代・濱原 泉 (2015) 「小学校での教育実習と実地体験活動を通じた学習経験：福山市立大学教育学部生を対象として」『福山市立大学教育学部研究紀要』3, pp.111-121.
- 福田 啓子 (2010) 「小学校教育実習における現状と展望 (III)：学生の教職観に関する調査から」『東京家政大学研究紀要1, 人文社会科学』50, pp.71-77.
- 羽賀 敏雄・豊嶋 秋彦・星 邦男・祇園 全禄・猪瀬 武則・安藤 房治・小山 智史・吹貝 賢一 (2001) 「社会性を育て、心を拓く教育を担う人材の養成－平成12年度弘前大学教育学部フレンドシップ事業の検証－」『弘前大学教育学部研究紀要クロスロード』第3号, pp.19-27.
- 羽賀 敏雄・吉崎 聡子 (2004a) 「体験的諸活動による教育実習の補完－地域と連携した弘前大学教育学部附属教育実践総合センターの取り組みから－」『弘前大学教育学部紀要特集号』pp.43-53.
- (2004b) 「教育実習を補完する体験的諸活動を経験した学生の成長」『弘前大学教育学部紀要』第92号, pp.173-180.
- 羽賀 敏雄・豊嶋 秋彦・小山 智史・野呂 徳治・田名 場 忍・吉崎 聡子 (2005) 「教育実習前に履修した体験活動の意義」『教科教育学研究』第24集, pp.131-141.
- 原 清治 (2009) 「現場体験活動は教員志望者の実践力を涵養するのか：学校インターンシップのもつ「効果」について考える」『佛教大学総合研究所紀要』16, pp.35-51.
- 原 清治・芦原 典子 (2005) 「実践的教員養成のあり方に関する研究：スクールボランティアと教育実習の関係から」『教育学部論集』16, pp.131-148.
- (2005) 「スクールボランティアがもたらす教育的効果の研究」『佛教大学教育学部学会紀要』4, pp.51-65.
- (2006) 「実践的教員養成のあり方に関する研究 II：スクールボランティアと教育実習の関係から」『教育学部論集』17, pp.81-98.
- 長谷川 哲也 (2015) 「教員養成における「学校支援ボランティア」の再考：S市小中学校教員への質問紙調査から」『静岡大学教育実践総合センター紀要』23, pp.113-121.
- ・望月 耕太・菅野 文彦 (2014) 「教員養成における「学校現場体験活動」の意義に関する検討 (1)－原理的矛盾を抱える学校支援ボランティアをめぐる－」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』22, pp.91-101.
- 橋本 啓紀 (2001a) 「正統的周辺参加理論の教育実習研究への展開試論－実習過程の社会学的研究に向けて－」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』47巻1号, pp.165-170.
- (2001b) 「教育実習における授業技術習得－「発問」を事例として－」『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部』50号, pp.241-248.
- 林 一夫 (2015) 「教員養成のためのボランティアやインターンシップの実態に関する調査研究：島根大学，仏教大学，明星大学の3事例を概観して」『教育学部研究紀要』(5), pp. 83-96.
- 姫野 完治 (2006) 「学校ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果」『日本教育方法学会紀要』32, pp.25-36.
- ・長瀬 達也・小松 正武・浦野 弘 (2005) 「教員養成における学生ボランティアへの支援体制の構築とその評価－放課後学習チューター事業の活動分析を通して－」『教科教育学研究』23, pp. 159-172.
- 今津 孝次郎 (1978) 「学生の内的側面からみた教師養成過程」『三重大学教育学部研究紀要』第29巻第4号, pp.17-33.
- (1979) 「教師の職業的社会的化 (1)」『三重大学教育学部研究紀要教育科学』第30巻4号, pp.17-24.
- (1985) 「教師の職業的社会的化」柴野 昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.166-182.
- 川村 光 (2003) 「教師における予期的社会的化の役割」

- 『日本教師教育学会年報』第12号, pp.80-90.
- 児玉真樹子 (2012) 「フレンドシップ事業の参加が教員養成学部生の自己認知および教職認知に及ぼす影響: 教職にかかわる自己効力感と、教職に必要な能力に関する認知の変化に着目して」『広島大学大学院教育学研究科紀要・第一部, 学習開発関連領域』(61), pp.15-24.
- (2012) 「教職志望変化に及ぼす教育実習の影響過程における「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」の働き—社会・認知的キャリア理論の視点から」『教育心理学研究』60(3), pp.261-271.
- 小泉令三 (2008) 「教員養成学部の学校支援ボランティア活動体験と教職能力の認知の関係—教職に就いた者と就かなかった者の比較—」『福岡教育大学紀要』57, pp.49-54.
- 栗原敦雄・柴沼晶子・永井聖二編 (1992) 『開かれた学校と学習の体験化—教師教育のパラダイム転換をめざして—』教育開発研究所
- 増田優子・田爪 宏二 (2015) 「教師志望学生における教師効力感と特性的自己効力感との関係: 実習経験者と実習未経験者との比較」『教育実践研究紀要』(15), pp.211-218.
- 松浦義満 (2003) 「教員養成学部学生によるスクールボランティア活動のもつ意義と役割—教育実践教室における事例研究から—」『和歌山大学教育学部紀要』53, pp.177-186.
- 南本長穂・加野芳正 (1990) 「生涯学習の視点からみた教師の学びの構造—小中学校教師の学習実態と職業的社会化—」『香川大学教育学部研究報告第I部』第79巻, pp.59-95.
- 三島知剛・石川裕敏・森敏昭 (2013) 「教職志望学生のフレンドシップ参加経験と授業・教師・子どもイメージ及び教育実習前後の変容との関係」『日本教育工学会論文誌』36(4), pp.407-418.
- 溝部ちづ子・石井眞治・古谷嘉一郎・齊藤正信・財津伸子・山崎茜 (2012) 「教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育効果に関する研究」『比治山大学現代文化学部紀要』19, pp.31-44.
- (2014) 「教員志望大学生の学校支援ボランティア活動の教育効果に関する研究(2)」『比治山大学紀要』(21), pp.31-43.
- 望月耕太 (2014) 「学校支援活動が教育学部生の教師としての職務内容と役割に関する理解の深まりにもたらす効果の検証」『教科開発学論集』2, pp.23-30.
- 望月耕太・長谷川哲也・菅野文彦 (2014) 「教員養成における「学校現場体験活動」の意義に関する検討(2)—各大学における学校支援ボランティア活動の名称の違いに着目して—」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』22, pp.103-110.
- 森下覚 (2015) 「大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』37(2), pp.287-300.
- 森下覚・尾出由佳・岡崎ちひろ・有元典文 (2010) 「教育実習における学習はどのように構成されているのか—教育的デザインと実践の保持のデザインとのダイナミクス—」『教育心理学研究』58(1), pp.69-79.
- 森下覚・久間清喜・麻生良太・衛藤裕司・藤田敦・竹中真希子・大岩幸太郎 (2010) 「学校支援ボランティアにおける省察的実践の支援体制と実習生の学習の関連性について—大分大学教育福祉科学部『まなびんぐサポート』事業を通して—」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』32, pp.261-275.
- (2011a) 「学校支援ボランティアの参カロ学生に対する教育的介入の効果—大分大学教育福祉科学部『まなびんぐサポート』事業を通して—」『大分大学高等教育開発センター紀要』3, pp.15-27.
- (2011b) 「学校支援ボランティアの運営体制の整備に関する研究—大分大学教育福祉科学部『まなびんぐサポート』事業を通して—」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』33, pp.109-124.
- 中山玄三 (2008) 「フレンドシップでの体験による学びの限界」『熊本大学教育実践研究』25, pp.1-20.
- 根津朋実・庄司康生 (2005) 「教育実習に先行する学校参加体験の意義—埼玉大学教育学部生を対象とした質問紙調査を手がかりに—」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』(4), pp.1-13.
- 西松秀樹 (2008) 「教師効力感, 教育実習不安,

- 教師志望度に及ぼす教育実習の効果』『キャリア教育研究』25 (2), pp.89-96.
- 西尾美紀・安達智子 (2015) 「教職志望大学生の教師効力感変化に影響を及ぼす要因の検討 — 教育実習中の体験内容に着目して — 」『大阪教育大学紀要第IV部門 教育科学』64 (1), pp.1-11.
- 野呂徳治 (2005) 「ふれあい体験活動による教職志望学生の教職観の形成—フレンドシップ事業から学生は何を学んだか—」『弘前大学教育学部紀要』93, pp.119-130.
- 小倉美津夫 (2014) 「学校インターンシップと教育実習の連結：その効果についての考察」『日本福祉大学全学教育センター紀要』(2), pp.7-16.
- 岡崎裕子 (2012) 「学校ボランティア・学校インターンシップの学習効果」『大阪大谷大学教職教育センター紀要』(3), pp. 47-52.
- 大越正大・松本 秀夫・内田匡輔・今村修・小澤治夫・中村なおみ・知念嘉史・今川正浩・山下泰裕 (2013) 「教育実習前教育体験活動の効果に関する研究」『東海大学紀要体育学部』(43), pp.43-51.
- 小澤熹・山崎祥子・岩見禎二・崎野三太郎・吉田裕美子 (2014) 「『学校教育体験実習Ⅰ・Ⅱ』に関する実践研究：教育実習の事前・事後体験教育の検討」『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』(52), pp.1-10.
- Porter, L. W., Lawler, E. E. III. & Hackman, J. R.1975 Behavior in organizations. New York:McGraw-Hill.
- 酒井宣幸 (2011) 「静岡大学における学生による学校支援ボランティア活動の実態と課題」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』19, pp 121-129.
- 阪根健二 (2006) 「学校ボランティア活動の実態と課題」『香川大学教育実践総合研究』13, pp.15-22.
- 嶋田一彦 (2012) 「教員志望学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値」『教育実践学研究』No.17, pp.1-18.
- 進藤聡彦・勢田二郎・澤登義洋・角田 (2009) 「大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果」『山梨大学教育実践総合センター研究紀要』14, pp.139-151.
- 杉原真晃 (2012) 「新人教員の苦悩に対して教員養成には何が出来るか：リアリティ・ショックを想定した教員養成のあり方」『山形大学大学院教育実践研究科年報』3巻, pp.40-50.
- 杉本希映 (2013) 「大学生による学校支援ボランティアの現状と課題」『目白大学心理学研究』9, pp.107-119.
- 田島充士 (2009) 「教職課程教育における学校インターンシップの可能性—ヴィゴツキーの「自覚性」概念を軸に—」『高知工科大学紀要』6 (1), pp.215-224.
- 高野和子 (2005) 「大学生の学校ボランティアをめぐる状況と課題—学校ボランティアはどのような文脈のなかにあるか—」『教育』55 (8), pp. 86-90.
- 武田明典・村瀬公胤 (2009) 「日本における大学生スクールボランティアの動向と課題」『神田外語大学紀要』21, pp.309-330.
- 田崎慎治・米沢崇 (2013) 「大学生の教師効力感と教師イメージ・子どもイメージに関する研究：広島大学教育学部フレンドシップ事業への参加による変化の検討」『学習開発学研究』(6), pp. 57- 65.
- 山本真人 (2014) 「学生の学びを支える「学校支援ボランティア」を目指して：振り返り会と評価シート開発による活用と課題」『静岡大学教育実践総合センター紀要』22, pp.111-123.
- 山本真人・菅野文彦・塩田真吾・長谷川哲也 (2013) 「『学校支援ボランティア』の動向に関する実証的分析」『静岡大学教育実践総合センター紀要』21, pp 131-142.
- 山崎準二 (2002) 『教師のライフコース研究』創風社
- 米沢崇 (2008) 「我が国における教育実習研究の課題と展望」『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部 学習開発関連領域』(57), pp. 51-58.
- 油布佐和子 (2013) 「教師教育改革の課題—「実的指導力」養成の予想される帰結と大学の役割—」『教育學研究』80 (4), pp 478-490.